防府市は、江戸時代中期から昭和三十年代まで、三田尻塩田として栄えた。塩田記念産業公園は、昔の塩田の諸施設を復元し、道具類の展示など、製塩の様子を紹介している。多くの小中学生が公園を利用し、塩田体験をしているが、何を伝えたいと考えておられるのかお伺いした。

探訪シリーズ　この人 この歩み
後世に伝える文化

防府市塩田記念産業公園
三　戸　　純 さん

＊三田尻塩田の歴史について教えてください？

防府市は、波の穏やかな瀬戸内海沿岸にあり、近世以前には、揚浜（あげはま）塩田、入浜（いりはま）の二つの製法で製塩が行われていました。

近世初期以降、萩藩は瀬戸内海沿岸で干拓を進め、元禄十二年（一六九九年）には、「入浜式」の三田尻塩田としての体制が整います。

七代目藩主、毛利重就公の時代には、藩内の殖産興業にはげみ、塩業者二〇一軒、塩の生産は三十六万石に達し、防長両国（周防・長門）での生産の半ばを占め、「播州赤穂」に次ぐ大製塩場として、日本の塩制史上大きな役割を果たしました。

三田尻の塩は主に山陰、北陸、東北地方に向けて「北前船」で積み出され、東北地方では塩のことを「みたじり」と呼んでいたとも伝えられています。さらに寛政十二年（一八〇〇年）には、ついに北海道にも販路が開け、三田尻塩の名は遠く北海道まで及びました。

明治三十八年（一九〇五年）には、塩専売法の施行に伴い、「三田尻塩務局」が、同四十二年（一九〇九年）には「専売局製塩試験場」が設置され、製塩技術の近代化に大きく貢献しました。

戦後、外塩の輸入と「流下式製塩法」の進歩による内地塩の過剰生産のため昭和三十四年（一九五九年）に「塩業整備臨時措置法」が成立し、江戸時代から二六〇年にわたり日本の塩業を支えた三田尻塩田の輝かしい歴史に幕が下ろされました。

＊塩田公園では、子どもたちに製塩作業の体験ができますが、その目的はどんなところにあるのでしょうか？

三田尻塩田記念産業公園では、塩の一大生産地として栄えた「三田尻」の功績を後世に伝えるため、当時のままに入浜式塩田で「三田尻塩」を作っています。工程の一部を体験することで、昔の人の塩づくりの大変さなどを実感することができます。

体験ができる時期は、四月から十月までで、約二時間かかります。体験内容としては、砂場を道具を使って整える浜引き、砂場に海水をまく撒潮（さんちょう）、濃度の高い塩水（かん水）を集める採かん、かん水を煮詰めて塩の結晶を取り出す塩焚きなどがあります。

海水から製塩するという過酷な作業を追体験することで、先人の知恵や努力を感じ、また、塩を介して防府が全国とつながっていたことを知ってほしいと考えています。また、塩田の利益が長州藩の経済立て直し、市内の様々な史跡と併せて、この防府が明治維新や我が国の近代化を支えたことを知り、郷土への誇りと愛着を持ち続けてほしいと願っています。

本年度、防府市で中四国音楽教育研究大会が開催され、中関小学校では、過酷な塩田作業で歌われていた「浜子うた」を取り上げた。また、市内の小中学生が塩田の記念公園で塩田作業を体験している。地域の文化や歴史にふれながら、地域への愛着心が育まれている。

（中関小　藤田健二）

編集後記

平成二十五年度が終わろうとしている。新学習指導要領が実施されて三年が過ぎる。各学校においては、学校の特色を生かした教育課程が実施され、「自校らしさ」のあふれる教育活動が展開されている。

さて、今年度もみなさんの協力を得て、年三回の小学校長会「会報」を無事発行することができた。

秋季研究大会での提案内容を紹介する「研究紹介」を始め、研究実践の交流を目的とした「支部情報」、幅広い視野からの意見や提案を求めた「飛耳長目」、一つの道を究めた先達の生き方を紹介する「この人この歩み」等、それぞれの欄に貴重な情報をお寄せいただくことで紙面を充実させることができたのではないだろうか。

これまで長年にわたって積み重ねてきた「会報」の情報が、これからも私たちの「絆」となって我々校長のお互いのつながりを深めることができたらと考えている。

平成二十七年度には全小連の全国研究大会を山口県で引き受けることになっている。会員の総力を挙げて成功させたいものである。

終わりに、ご多用中にもかかわらず原稿執筆を快諾いただいた皆様に感謝の意を表し、編集後記とする。